

筑豊イズムアップ 座談会 (西日本新聞 1990年1月1日～9日)

川筋気質の徹底研究

「筑豊」という語感に、大抵の人が「暗い」と言う。明治時代、遠賀川流域に炭鉱が開発され、「筑豊炭田」として史上初めて「筑豊」の名が登場したのは言わずもがな。旧筑前と旧豊前。藩政時代には異質の文化、経済圏でありながら、石炭時代の隆盛とともに「筑」と「豊」は緊密に合体。石炭輸送の大動脈となった遠賀川流域に「筑豊」と云う独特の生活・文化・経済圏を築きあげ、日本の近代化を支えてきた。それが昭和三十年代以降のエネルギー革命で繁栄も誇りももぎ取られた。

石炭が全くなくなり、旧産炭地となり果てた筑豊。かつての繁栄のよすがもなく、衰退、沈滞の中に置き去りにされた地域も、各地で芽生えた新しい地域づくりの運動で活力を取り戻しつつはある。

筑豊がさらなる飛躍、発展を遂げるべく、明るい筑豊の未来を筑豊の人々が自ら切り開くべく、西日本新聞筑豊総局は、川筋気質に代表される筑豊独特の歴史の所産を再検証し、新たなる「筑豊イズム」の構築を図ることにした。まずは、筑豊の風土と人間性のかかわりを象徴する川筋気質について、それぞれ筑豊に生き、筑豊にこだわりを持つ六氏に集まってもらい、川筋気質を、筑豊を徹底的に討論してもらった。「筑豊イズムアップ—川筋気質の徹底研究」を7回にわたって連載する。

出席者 (50音順)

井出川 泰子氏(56) = 鞍手町歴史民俗資料館嘱託。著書に元女鉱員からの聞き書き集「火を産んだ母たち」 鞍手町新延

犬養 光博氏(50) = 牧師。炭鉱閉山後「筑豊の子供を守る会」キャラバンで筑豊に来てそのまま住む。金田町福吉伝道所

加地 豊氏(43) = 筑豊ムラおこし・地域づくりゼミナール事務局長。タクシー会社役員。稲築町漆生

永末十四雄氏(64) = 郷土史家。近畿大学九州短大教授、元田川市図書館長。炭鉱の歴史資料の収集と保護に努め、筑豊の炭坑誌に詳しい。田川市川宮

船越 裕一氏(37) = 直方青年会議所元理事長、日本青年会議所福岡ブロック副会長。インテリア会社経営。直方市殿町

本郷 英士氏(68) = 近畿大学九州工学部長。筑豊ゼミ実行委員会会長。九州工業大学情報工学部準備室初代室長。北九州市小倉南区守恒

司会・寺崎 一雄 西日本新聞筑豊総局長

< 1 > 私のイメージ

遠賀川と石炭が結びついた所産

生活も語らいも本音勝負

——まず、川筋気質とはどういう気質か。今でもあるのか、ないのか。そのあたりから話を進めていきたいと思います。

男性的な気概

永末 私は田川の後藤寺小学校に入学したが、ここは町の小学校で、炭鉱の小学校とも、村の小学校とも違う。それぞれにやっぱり壁があって、ふつう、炭鉱の子とは遊ばない。でも、おやじから言われたのは、やっぱり「けんかに負けるな」でした。私は虚弱児童だったので、よく負けましたよ。泣いて帰ると大変、おやじからまたたたかれたり、水をぶっかけられたり（笑い）。

その一方「弱いものいじめはするな」とも言われた。男というのは意地を張れ、ばかにされるとこの世界では生きられないんだ、ということを教えてくれたんでしょう。男性的な気概、気概だね、川筋気質は。商人的な合理性や女性的な繊細さとはちょっと異質のものでしょ。

——女性にも川筋気質はあるんでしょうか。現代の女性の中にも残っているのか。如何でしょう、井出川さん。

真っ当に生きる気

井出川 あると思う。あるどころか、私はべったり浸かり込んでいる（笑い）。今まで私が会ってきた人は、みんな炭鉱で働いてきた人たちですが、どれが川筋気質か一口で言うことはなかなかできない。一番言えるのは、損得勘定があまりできないというか、お金で計算できないところがあって、損するとわかっていてもめり込んでしまう。

川筋の気質と言うと暴力的な感じがするかもしれません。百人アンケートでも“けんかつ早い”が一位になっていますしね。でも本当は真っ当に生きるというか、そういう気持ちだと思う。理屈じゃなく、体で真っ当に生きる、そんなひたむきなものというふうに、炭鉱で働いていたおばさんたちから感じた。もし、川筋気質がなくなるものなら、最後に、生きている間は私は川筋の女でありたいと思う。

心の機微感じ取る

チップ多いところ

加地 こんな話がある。筑豊はタクシーのチップが多いんです。乗務員のサービスが良くて丁寧に應對すれば「あんた、いい運転手だなあ。つりはいいよ」と言ってくれる。多い人で月に3万になることも。筑豊以外でこういうことはない。お客が心の機微を敏感に感じ取っていると思う。“宵越しの金は持たない”というような気前のよさでチップを払う。僕は大衆の中にこうした川筋気質は残っていると思う。

拒絶反応ある

船越 私は、実は川筋気質に拒絶反応がある。私自身、街中で育ち、どっちかという理屈が多い生意気なほう。「なんちかんち言いなんな、理屈じゃなかない」というのには、まず拒絶反応があった。

気風の良さとか身内での仲の良さという感じもしますが、自分たちが許容し合える仲では気風もいい。しかし、異質な者が来ると、反発するか違う者として切り捨ててしまうなど偏狭な面が見える。そんな部分が非常に強いような気がしますね。

——犬養さんは、大阪から筑豊に住まわれて24年になると言うことですが、川筋気質とはどういうものとおもわれますか。

初めは抵抗も

犬養 僕は筑豊に閉山の嵐が吹き荒れた時、全国的に広がった救済運動の「黒い羽根運動」の後にできた「筑豊の子供を守る会」というキャラバン隊で初めて筑豊に来た。それを入れると30年くらいになるが、川筋気質をどういうものかを言うのは難しい。筑豊は大阪と全然違い、不思議な感じがしたし、けんかつ早いところなど、初めはかなり抵抗があった。でも具体的にいろいろな人と会ってみると、少なくとも本音で生きているんだ、というのがある。

僕なんかも当時、大学生で、理屈が先行するところがあったが、理屈がほんまものかどうかというのが、そういう人たちとの語らいや生活の中で試されている。ほんまものであれば受け入れられていく、通用していくというのがあるんじゃないか、僕はそんな気がしている。

カミシモ着たり肩書き持ったりして生きている人間に対して、「おまえの素顔を見せる。おまえ、裸になれ」と言うが、そこで付き合うという感じがあって、僕は非常に新鮮でした。それが川筋気質と言われるとすれば、大切にしていけないかんという気がようしてるんです。

——本郷さんは、小倉から筑豊へ通っているわけですが、外から見て川筋気質はどうですか。

筋が通れば盲目的

本郷 そうですねえ。ここは理屈が受け入れられやすい所です。ある程度筋の通った話で、こうすると言ったら、やや盲目的についてくる。権威に肩張って強いところがある半面、ある意味で権威に少し弱いところがあるんじゃないかと思う。

語弊があるかもしれませんが、私の背後には大学があるわけで、「大学の学部長が言うことだから」——もうちょっと言うと「だから間違いなからう。あれの言うごとしとこう」という感じになる。

——全国でも川が気質に結び付けられて語られるのはここ遠賀川流域だけでは……。どうしてこの筑豊にだけ川筋気質が生まれたのでしょうか。

自由奔放な明るさ

理屈じゃない

永末 川筋という言葉自体は遠賀川だけにあるものではない。ただ石炭という近代産業と川が結びついた点は、他に例がない。筑豊を語るとき、遠賀川を抜きにしては語れません。

採炭は江戸中期から始まったが、水運の便がなかったら石炭は産業として成立しなかった。全体の生産工程から言うと、採炭より石炭を運ぶ過程の方がずっとウェートが大きかった。

だから、船を操る船頭は景気がよかった。いくら採炭してもそれを運んでもらわないと話にならない。採炭する山元との対立や船頭同士の競争など船頭の仕事は男を上げるのに格好な場であった。

また、腕っぷしが強いだけでは船頭は務まらない。自然の状況の変化に即座に対応し、瞬時に判断することも要求された。理屈じゃなく、白か黒か、イチがバチか——なんですよ。遠賀川の船頭たちは、そうした職業的属性から「キリクサン」と呼ばれる独特な理想的タイプを生み出した。川筋気質の中にある、ある種の明るいイメージは、川筋の船頭たちが持っていた自由奔放さや開拓者的な明るさによるものだと思う。

川筋気質に関する百人アンケート

| | | | |
|------------|-----|----------|-----|
| ① けんかっ早い | 49人 | ⑥ 面倒見が良い | 26人 |
| ② 筋を通す | 34人 | ⑥ 荒っぽい | 26人 |
| ② 人情に厚い | 34人 | ⑧ 豪快 | 25人 |
| ④ 義理堅い | 32人 | ⑨ 気風がいい | 24人 |
| ⑤ あっさりしている | 31人 | ⑩ 大ざっぱ | 20人 |

< 2 > 歴史と特性

石炭輸送の船頭が生む

近代的意識育たぬ面も

——川筋気質というのはいつごろからあったんでしょう。

堀川筋の気分

永末 「川筋気質」という言葉がいつから生まれたか、というのははっきり分かりませんが、天保年間（1830－1843）に出てくる「堀川筋の気分」という言葉が、恐らくは「川筋気質」の始まりではないかと思われまます。大正中期の折尾警察署管内事情報告には「川筋気分なるものにて」という記載があります。戦後ですね。「川筋気質」が広く使われたのは、筑豊には独特の気質があると自覚されるのは、やはり石炭と遠賀川のせいでしょう。川筋気質というのも、もともとは遠賀川を川舩（かわひらた 五平太船）で上り下りして石炭を運んだ船頭たちが産み出したものですからね。

そして、一般に船頭気質は炭鉱労働者の中に伝えられたと簡単に考えられています、船業と炭鉱業は密接な関係にあったわけです。炭鉱労働者から船頭になるもの、船頭から炭鉱に移る例はかなりありました。

船頭気質と炭坑気質はほとんど同じような内容を包含しています。ただ、歴史的な経験の蓄積度では炭鉱業の方がはるかにあるわけで、川筋気質とは炭鉱業の激烈、不安、そして並はずれた活力の反映であったと言えます。

——作家の五木寛之氏はある対談の中で、自分は大陸から引揚げ、行商で筑豊に行ったが、非常に開放的な土地柄で、よそ者を拒まない気風があったと評しています。川筋気質にはフロンティアスピリット見たいなものがあったのでしょうか。

開放的土地柄

永末 それはあります。第一、炭鉱の“御三家”と言われた人たちだって、元をただせば資本家でも資産家でもない。石炭産業というのは非常に労働集約的な産業ですから、労働力を集めなければならない。ところが、これがまた景気、不景気の波が激しい。一定の労働力を構成するには、よそ者に来てもらわなきゃならない。開放的にならざるを得ない。ただ、それは人間関係を成熟させるいとまがないってところもありましたがね。

無条件に受容

井出川 小学生の時北九州で空襲に遭い、今の鞍手町に来ました。ここで通った小学校は、児童の半数以上が遠賀川の支流・西川筋の小山の炭住から来ていました。焼け出されて来た私たちを一番初めに受け入れてくれたのは、炭住の子供たちでした。

炭住の子供たちは皆、赤ちゃんをおんぶしたり、いろんな仕事をしていましたね。あるおばさんなんか私に「カラゴタイ（手ぶら）のまま遊びよおか。なら、守りなさい」と、いや応なく子供を背中にくくりつけるんですよ。でも、それがあんまりいやじゃない。むしろ楽しかったくらい。「どこから来たか」とも言わんし、だれでも無条件に受け入れてくれるというところがあった。

自立できない

永末 例えば、京都というのはどの家も間口が狭く奥行きがあって隣の人に見せないでしょう。筑豊はその真反対。集団全体が開けっ放しで裏表全部見通せる状態ですね。炭住では晩飯のおかずが全部分かる。どこがサンマ焼いた、イワシ焼いた、すき焼きだとか・・・。個人の生活が隠せない面もありますから、近代的な個人主義というのがなかなか育たない。「なべの底まで見せ合う仲」というのは言って見れば、1人ひとりがきちっと自立できない弱さでもあるわけです。筑豊の人間は素朴だけど、残念ながら京都人の方が成熟している。

違う思考方法

犬養 どこで生活しているとか、だれと交わっているとかで、川筋気質のイメージはかなり違うのでは。僕は炭坑閉山後に筑豊に来たわけですが、自分が体験したのはごく一部なんだというのが、このごろようやく分かるようになってきたんです。

こっちに来たとき、筑豊の人たちは僕らの言葉で言うと“考えない”とよく思ったんです。それが今では僕たちの忘れた思考方法で考えているのでは、と思えてきました。

例えば、（代表者が）失業対策などで出掛け、上部団体の話を持ち帰るとき、僕らならばまとめて報告しますが、筑豊の人たちは聞いたその通りをやりだす。だから聞き手も拍手をしたり、ヤジを飛ばしたりする。参加していない人たちに（話を）再現しているわけです。僕たちが考えられないパターンで、人間らしくやっている。僕らがデメリットと思っていることを、もう一回問い直さなければとも思うんです。

< 3 > 人物像と背景

曲ったことが大嫌い

独自の感性と生活様式

——川筋気質を代表する人物と言え、だれでしょう。

スケール違う

永末 やっぱり貝島太助（1844年－1916年、貝嶋炭鉱の創始者）と吉田磯吉（1867年－1936年、川艦=かわひらた=の船頭から任侠=にんきょう=政治家として名をあげる）。スケールが違いますよ。

貝島太助は一介の坑員からたたき上げ、地場資本では最大規模の炭鉱会社にの仕上げた大物で、太っ腹の男ですね。

吉田磯吉は川艦の船頭から腕力と胆力で頭角を現し、会社や商店を喰い物にする連中を街から排除して男を上げたりした人物です。明治末、東京と大阪の相撲協会の対立を解決させた話は有名ですね。

井出川 名もなく金もないけど、曲ったことが大嫌いで、人間として嫌だと嫌だと言いつける人、そんな人、意外とこの川筋に多いんですよ。身近に結構ね。

本郷 川筋気質百人アンケートで川筋気質を代表する人物に織田信長が挙がっていますが、戦国武将への誤解があります。戦国の武将などは、何かをやる前の晩は本当に弱気になって一生懸命考えた。やるときは大筋だけを頭に入れて「それいけっ」とやっていた。筑豊にはその前段が欠けているのではないですかね。川筋気質というのが、現実的に「やれっ」という勇ましいところだけであるのなら、非常に疑問です。

——アンケート結果を見ると、「筑豊」と「川筋」と言葉が使い分けられているようですが。

ロマンの解釈

船越 筑豊と川筋はどんな違いかというと、言葉の問題があると思う。筑豊というと、地域の現状が暗い感じがして何となく暗いですね（笑い）。気質というのは客観的な価値判断を拒む性質のもので、誇りとか支えというものがバックにあるだろうから、好意的にとらえられる。

永末 気質というとロマンチックな解釈をしますね。川筋気質は遠賀川にさおさした船頭の気質で、炭鉱とは違う。昔の炭坑はちょっとダーティーで暗い。船頭集団は早く消えてしまいましたから、そういう意味では過ぎ去ったものへの哀惜というロマンチックな感じが川筋気質。炭鉱は目をそらせない現実ですから、ロマンチックに成りきれないところがある。

論理的に解明

加地 石炭史と地域史がどうも混同していて分けられていないようですね。どうして、石炭という日本の近代化を支えたエネルギー源が学問的に検証されないのか、不満でならない。そこをうやむやにしているおかげで、筑豊の人たちは縄文時代からの古い歴史をないがしろにしていないか。僕らのムラおこしは、そこに焦点を当てたかった。

歴史を論理的に解明しないと、今が冷静に語れません。その中で川筋気質がいいものだとすれば、新たに引き継いでいけばいい。

仮住まい社会

永末 日本社会の基礎は農業にあるという気がしますが、炭鉱町は都市とも農村とも違う。独自の行動様式なり感性を育てざる得なかったわけです。それをいいとか悪いとか言っても始まらないが、炭鉱の形態を一口で言えば、非農業的、非農村的なんですよ。

農村は永続的なもの、継続的なものが価値の基礎なんですね。ところが、そんなもの作れない。炭鉱はね。全部仮住まいの社会なんです。小ヤマでは3-5年のサイクルでしか生活できない生態もあり、そんな仮設的な生活様式が、常設的なものに影響を与えているのが筑豊です。

見えない範例

犬養 川筋気質は炭鉱とか船頭なんかの労働形態の中から生まれてきたものと思うのですが、炭鉱も船頭もなくなった今、これから変質していくものでしょうか。それとも、労働形態と結びつかないものは、だんだんなくなっていくものですか。

永末 筑豊の場合、今も炭住が二万五千戸もある。各種就労事業も残っていますね。炭鉱時代の生活様式を残す基礎が頑として残っているわけです。これはいきなり消そうたって消せない。炭鉱から脱皮した人もいれば、経済的、社会的力を持ち得ず自立できる基礎のない人もたくさん残っている。それをたな上げにして進むわけにいかない。社会福祉と公共事業は生活に緊張感が薄いですよ。昔の方が乱暴だったけど緊張感がありましたね、リスクが大きいから。炭鉱から次の社会をつくるパラダイム（範例）がまだ見えていないから、古いものを引きずっていくしかないのではないのでしょうか。

< 4 > 筑豊の根っこ

女坑夫に教えられ知る

炭鉱の闇、近代の闇

——井出川さんは、女坑夫や被差別部落の問題に取り組んでおられますが、筑豊には日本全体が考えなければならない問題の素材があると思われます。そういう点でこだわっているのは、どんなところですか。

内側の目から

井出川 私は素直に言って、筑豊を知りたいという気持ちなんですね。私は何も知らず、疎開でこっちに来て、“暗い谷間の筑豊”というのがとっても嫌だったんです。それが、女坑夫のおばさん達の話聞いていく中で、嫌だと思っていた筑豊が、実はそうじゃなくて、こういう人たちが力の限りに真っ当に一生懸命働き抜いた土地だったのか、と目を開かされました。

ここで生きて働いてきた人たちの思いから私の筑豊観というのが出来上がりました。今考えるとむしろ理屈で歴史を知らなかったことが自分には良かったのかも知れません。

筑豊を外側の目で見ると嫌なところが多いんですが、内側の目で「私の筑豊」というものをしっかり知りたいという気持ちでした。

今一度見直す

それでもまだ、被差別部落のことは全く見えてなくて、おばさんたちから教えられて、もう一つ根っこがあったんだ、という気持ちでした。今、部落のおばさんたちの話を聞いています。

筑豊の根っこのところからもう一回見てみたら、もっと違った目で筑豊が見えるんじゃないか、という気がしています。でも皆にいうと「今ごろそんなことしてどうするね。どんどん明日のこと考えていかにやいけんのに、21世紀はそこに来るのに」といわれます。

私は、でもみんながその根っこのところを知らないで過ごしていたら、取り返しのつかないことになるんじゃないかという気がして、せめてそこらへんにこだわっていきたいと思っています。

——犬養さんの場合、筑豊にこだわり続ける理由はなんですか。

解答はあるか

犬養 僕は上野英信先生が筑豊でされた仕事を抜きにして、自分自身の筑豊とのこだわりみたいなのは語れないんです。上野先生の「筑豊よ、日本を根底から変革するエネルギーのルツボであれ 火床であれ」という遺言がありますが、この座談会で問うてみたいのは、その「筑豊よ」という問い掛けに答える部分って一体何なのかということ。あるいは変革するエネルギー、火床が筑豊にはあるんだと思っておられたと思うんですが、それは先生のロマンであって、そういうのはもう古いのかどうか——ということですよ。

——上野さんが亡くなられて二年以上たちますが閉山で追われていく坑夫たちを追い、その後も筑豊にあって炭鉱の闇(やみ)を通して近代の闇の部分を見据えたとも言える上野さんの仕事は、まさに筑豊へのこだわりの所産でしょうね。

上野氏の視点

犬養 現実にはそこにあるものをどう担っていくかという形の中では、上野先生の問題は片隅のある部分じゃないか、という気がしないでもないわけです。筑豊全体が上野先生が言われたように変わっていくのは考えられませんかあ、と。でも、もし上野先生のような視点を抜きにして、筑豊がイメージアップや変革するとかになると、それは日本が近代化の中でやってきたいろいろな問題としてもう出ていると思うんです。それをもう一回繰り返すのか。

ただ、なかなかそういう議論が今は難しくて「そんなのは古い」「ロマンであるかもしれないが、現実の問題ではない」などと言われることが非常に多いです。それでも僕は、上野先生が語っておられたことをしっかり押さえながらしか、これからのことは考えられん、という立場です。それが筑豊にこだわっていることなんだ、と僕は思っています。

——24年間筑豊を見てこられて、状況は良くなってきましたか。

道筋を求めて

犬養 いえ、そうは思いませんね。ますます見えにくくなっている。上野先生は「お前、ここを掘れ」というようなことはおっしゃらなかったし、書かれた本の中にチラッと、それこそダイヤモンドのように光る道筋も、それが一つの力になっているとか、大勢になっているとかいうことはありませんからね。

< 5 > 負の遺産

なんちかんちと言うな

そこに理屈抜き精神

——川筋気質のメリット、デメリットに移りましょう。「長いものに巻かれろ」「理屈を言っても始まらない」などといった現状肯定主義というか、没理論的な体質が筑豊の精神風土の中にあるんじゃないか、という気もするんですが。

つい手が出る

加地 確かにみんなで話し合うのが下手な気がしますね。裸の姿を見せ合わなければ、相手を“好き嫌い”で見てしまう。自分の姿を見せたがらないんですよ。ようやく信頼関係が生まれても、今度は議論のまとめ作業ができない。なれていないんじゃないかな。炭鉱閉山後の十数年というのは、どうも声の大きな人たちにみんながついて行っていた。

船越 筑豊ではよくこんなことを言います。なんちかんち言いなんな、理屈じゃないったい、と。

井出川 順序立てて相手に伝える作業が、なかなかできないですね。「そうじゃない」と思うと、つい手が出たりしてしまう。「くどくど言いたくない、分かる者に分かるんだ」というところもあります。私自身、川筋気質を持っていますので、周りの人が川筋のことを悪く言うと、ついカッとなってしまう。「そうじゃない」と思っても、相手にうまく説明できなくてまたカッとなり、それが相手に誤解を与える。そんな失敗を、私も数限りなく繰り返してきました。

主体的な議論を

永末 川筋気質は概念として、きちっと整理されていないんですよ。筑豊は学問の対象になっていない。社会学、民俗学的な研究でも炭鉱の要素が欠落しています。また石炭六法延長といわれるが、一、二回はいいが、三、四回となるともう通用しないことをわれわれは分かっているでしょう。

東京が石炭問題をどのように見ているのか、政府が石炭政策を通じてどのような産業構造の転換を図ったか。われわれは他の産業との比較さえしていない。確かに六法は切れたら困るが、さらに継続して手当てを受けるためには、よほど主体的な理論構築をしていかないと政府を説得できない。それをしているのかというと、現実には単なる反復でしょう。「理屈じゃない」という気質の弱さなんですね。

——筑豊について、奥田知事は福岡県の恥と言ったことがあります、いま筑豊をだめ
にしているものは何だと思われませんか。

北九州の郊外

永末 閉山後みんな筑豊はひどいと言うが、足りないものが多い反面、過剰なものも目
につき過ぎる。そのへんを再検討しないとイケない。一方で、子供がよそへ行って自分
の出身地を言えなかったり、「北九州の郊外」と言ったりする現状が、いまだにある。
石炭が正当に評価されていない。

本郷 九州工業大学情報工学部の準備室長をしていた時に痛感したのは、筑豊の人々は
せっかち過ぎるということです。大学がくれば、明日はベンチャービジネスが来る、あ
さっては筑豊みんなが懐豊になる、と安易に発想してしまう。

風通しが悪い

船越 与えられていることに慣れすぎて、要求することがビジネスになっている。役所
というのは住民から見ると要求する所、役所の方から見ると住民は無理難題を言うてく
るものという関係が固定してしまい、風通しが悪い。排他的に凝り固まっている。

永末 炭鉱の文化を粗雑にしているところは（筑豊以外には）ないですよ。北海道の夕
張市には石炭博物館があるのですが、夕張市と田川市の取り組みが違うんですよ。夕張
市は道庁や経済界の援助を受け、第三セクター方式で運営していますし、保存行動があ
り展示も質量とも田川を上回っている。単なる箱ものでなく、夕張市の再生の拠点にし
ようという思想が感じられる。

田川市図書館長時代、石炭資料収集に当たった責任者として自己懺悔の気持ちで言う
んですが、北海道から帰ってきて「夕張に学びなさい」と言ったが、相手にされなかつ
た。それが非常に心残りです。

またも箱もの主義

加地 亡くなったある町長が、生前「筑豊は“箱もの”ばかり作ってきて、ソフトを忘
れていた」と話していた。ところが新しい首長はまた、“箱もの主義”になっている。
いま地域づくりセンターで 25 市町村を回っていますが、ソフトを言う首長は未だ何分
の一に過ぎない。

永末 箱もの主義はいまの行政の欠陥なんですよ。特異な歴史を体験し、犠牲を払って
いながら顧みられていない。せめて現実はどうなのかというデータぐらい集めなくては。
単独市町村ではできないという状態がありながら、自分のところしか見ていない。連帯
の論理、方法というのが生まれていない。ただ「陳情、陳情」というだけでは、耳を傾
けてくれんでしょう。

< 6 > 筑豊の一体論

未来開く結束こそ

地域の独自性を基礎に

——将来を展望するのに、筑豊はひとつ、という視点は必要でしょうか。

共通の生活圏

船越 筑豊一体論はある程度必要でしょうが、後ろ向きの必要性だと思うんです。筑豊は筑前と豊前から成り、もともと一つの土地ではありませんからね。

加地 それを逆に前向きの必要性ととらえたらどうでしょうか。確かに筑豊と言っても、石炭で結ばれた象徴的な地名で地図にも載っていない。経済圏としても別のものでしょう。しかし、遠賀川の文化圏、生活圏として見ると筑豊は共通のものとしてあると思います。

違う土着気質

永末 筑豊はひとつとよく言われますが、僕から言わせるとひとつではないんですよ。社会階層的に炭鉱、町、村とあるし、地勢的に川上、川下がありますしね。筑豊土着の気質は、地味でつましいものです。川筋に対して「山つき」という言葉がありますが、農村は川筋に対して反発するんですよ。

ところが、この地域に日本を代表する巨大資本である炭鉱が林立したわけです。そこではぐくまれた川筋気質という一つの産業的性格が、人間の考え方、行動を決めて行って、炭鉱だけでなく町や村もその気質に染まっていったということです。だから気質の点でも必ずしも筑豊はひとつではないわけです。

本郷 一致団結はなくてもいい。それぞれの方向を走り、それで立派に成長できればいいんですよ。ただ、大きな事象については穏やかな結束を保つたらどうだ、と提案したい。

自己認識ない

永末 行政面から見て政策論的には筑豊はまだひとつでなければいけないでしょう。筑豊経済はまだ竹馬に乗った経済。(石炭六法の存続で) また竹馬を貸してくれと言っているわけですか。当然、なぜ竹馬がまだ必要か説明できないといけません。しかし「国のエネルギー政策の犠牲」と唱えても、もう通じませんよ。鉄鋼も農林、水産も同じ犠牲者ですから。

なぜ（筑豊経済が）うまくいかないかを、われわれ自身が自己主張しなければいけない。ところが、実際は筑豊はまだ自己認識もできていない。行政も筑豊を総合的に整理するセクションがないし、系統的な調査も行われていないのが現実です。
——期限切れが迫っている石炭六法について、どう思われますか。

運動の総括を

船越 私自身は、石炭六法はいつまでも存続すべきものではないと思う。そういうことを言う「持っている茶わんをたたき落とすようなもの」と言われるのですが・・・。

永末 石炭六法を含め、いろいろな権利を勝ち取ってきたことは正しかったと思いますよ。それが筑豊のバイタリティーであり、ぎりぎりの生活の中で生きんがための闘いだった。六法のような政策を引きだしたのは大きな力だったと思うんですよ。六法は国の産業構造転換のモデルになったわけです。歴史的意味と石炭政策的意味で自負心を持っていい。

ただ、現在の筑豊は経済的、社会的自立の基礎がない。自立の方法論が見つからないまま、要求の運動が自己増殖している。過去の運動の成果と方法を総括しないと、いつまでも要求だけに終わってしまう。

ゆっくり改革

加地 若い連中は、極論で「石炭六法はなくし、そこから始めるべきだ」と言うようになりました。システムを変えない限り、いつまでも同じことの繰り返しです。われわれから企画書を書いて上に上げ、いい企画であれば、予算をつけてもらう。それは日本の国民として正当な要求でしょう。そんなことを政治家はやらない。住民自らがやらなくちゃいけない。少々時間がかかってもいいんです。

井出川 私たちが鞍手町歴史民俗資料館をつくるのに十年かかりました。初めはまるで相手にされず「つくって」と言うだけではどうしようもないと分かりましたので、まず中に入れるモノから集めてみました。そういう運動が十年かかったわけですが、理解する人々がどんどん広がっていきました。

あれ以来、私は運動と言うのはせめて十年をサイクルに考えよう、自分の代でできなかつたら、次の代に引き継いでいけばいい、と考えるようになりました。壁にぶつかっても「なあに、十年かければ変わる」という自信みたいなものが出てきたんです。みんなの心をひとつひとつ確かめ合いながら、焦らず、ゆっくり改革していくことです。

< 7 > 明日への視点

心の豊かな古里がある

アジア問う筑豊の経験

——筑豊を駄目にしてあるものが川筋気質にあるとすれば、それはどういう点でしょうか。川筋気質に関する筑豊百人アンケートでは「けんかつ早い」が第一を占めました。また「遊び好き」「大ざっぱ」「荒っぽい」なども多く指摘されています。こんなイメージも関係しているのでしょうか。犬養さんどうですか。

スカブラの話

犬養 どうでもええときは、チャランポランしとるけど、本当に人間らしくせにゃいかんときに、きちっとできればいいんじゃないでしょうか。上野英信先生の「スカブラ」の話が、僕はものすごく好きなんです。この主人公は坑内に下がっても仕事はせずに、時計ばかり気にしている。しかし、彼がいることでなぜか仕事ははかどるし、坑内事故があると彼は活躍するんです。

僕は一生懸命やっている人たちには申し訳ないんですが、筑豊は遊んでええんやないかという気持ちがあるんです。日本全体が変な方向に進んでいるのに、筑豊だけはそれに整合する必要は全然ないと思う。あれだけの体験をしてきた筑豊だから、遊びみたいにしていく部分を、むしろ大切にしていっていいんじゃないかと思うんです。

加地 大都市が金ばかりに奔走しているいま、筑豊は悠然と構えていると見えないこともない。でも、ここに来たら古里がある、人間の心と自然の豊かさがある——それを筑豊のアイデンティティーにしたら、というのが僕らの運動の原点なんです。

——筑豊の展望を開くためには何が必要でしょうか。

誘致より起業

本郷 企業誘致はやめた方がいい。誘致企業は日本で条件が悪くなれば中国へ逃げ、中国で賃金が悪くなれば、フィリピンに逃げていきますよ。だから企業ではなく「起業」、つまり自ら業を起こす。小さくてもいいじゃないですか。

民衆史を作る

犬養 福岡県や国が言っているのとは別な意味で、アジアというのをもう一回問い直さんといかん、という気がします。筑豊が日本の底辺というときに、僕は筑豊に来ましたが、県外就職者は関東や関西の紡績工場などへ行っていました。今、紡績工場は韓国や台湾、さらにタイやフィリピンへ移っている。つまり筑豊が占めていた位置を、今はアジアのどこかが占めている。そんなかわりが筑豊の中で見えてくると、問題がわかってくると思うんです。

井出川 私は身の回りの地べたに立っている人々が、それこそ十年計画で筑豊の民衆史を作る草の根運動を広げ、歴史を検証しながらどう生きていくかを考える作業ができたら、と思います。そういうことを知らないままにどんどん時が過ぎ、新しいものを入れて行くだけでは、それこそボタ山のボタのようになって死んでいった人々に、本当に申し訳ないという気がするんです。

破壊望まない

加地 日本はODA（政府開発援助）で金を外国へばらまいているが、筑豊に対してやっていることと同じ失敗をしないでくれ、ということを筑豊の人々は、先輩として訴え続ける責任があると思うんです。

井出川 変な言い方ですけど、これまで資本の手で切り売りされてきた筑豊をもうどこにも奪われたくない、という気持ちなんです。戦争の空襲にしても、炭鉱の閉山にしても、そこに生きている人々が望まないのに、ほかの力によって見慣れた風景が理不尽に破壊されてしまう。それはもうたくさんです。

負い目を払う

犬養 上野先生の目は差別を受けたり、苦しめられたりする中で出てくる人間の素晴らしさを掘り起こして見せてくれた。分析すれば前近代的、封建的な部分も出てくるかもしれないが、そうしたものを含め筑豊が再生していくための基礎になって行かないやいかん、と思うんです。

井出川 みんなで「筑豊出身だァー、筑豊でなんで悪いか」ということを胸を張って一緒になって言えば、自分の中にある負い目みたいなものを振り払えますよ。

よそのどこにもない川筋気質のいいところをきちんと受け継ぎ、川筋気質丸出しの風土の中で暮らしていけたら最高と思っています。うちの娘たちともよく話しているんですよ。どこに嫁に行っても、春になれば遠賀川の菜の花を見に、必ず帰ってこようねって。

(おわり)